

令和4年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽松高等学校

重点目標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
1 生徒一人ひとりの適性と能力に応じたきめ細かい学習を行うため、指導に関わる全教員で個々の教育的ニーズを把握したり、手立てを検討したりしながら指導の充実を図る。	① 基礎学力の定着に向け、各教科で「授業がわかりやすい」と生徒が満足できるよう、授業改善に努める。	授業改善により、高校生のための学びの基礎診断の成績（文章読解・作成能力検定4級等以上）が向上した生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	R4 準2級合格率 40% 3級合格率 60% 4級 32% 全体 38%  <b>D</b>	（教務課）今年度も、国語の授業で条件付き意見文の書き方等説明を行った。さらに、週末課題を出し、提出されたものの添削・返却を行い、他教科でも資料を読み取りまとめる等の設問の設定・実施に努めた。その結果、準2級を受検した5名の内2名が合格することができ、前年度より3級合格者が約13%、4級合格者が約17%上昇した。一方で、論説文・意見文作成の分野での得点率は低く、無解答の者も複数名いた。また、課題の提出率が下がっている。そのため、今後も授業や学校行事等学校生活の中で、生徒が自分の意見を言葉にする（話す、文章化する等）場面の設定に努める必要がある。加えて、生徒に学びの基礎診断やそれに向けての学習の意義をよりよく伝え、少しでも前向きに取り組んでもらえるよう働きかける。
	② 授業力の改善と、教員の資質向上を図るため、発達障がい者理解のための研修を含め、校内外への各種研修に積極的に参加する。	校内外の研修に、6回以上参加した教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である	80.0%  <b>B</b> 【R4.7 B 87%】	生徒1人1台端末に対応した教員の授業スキルアップのための校内 GIGA ミニ研修会（月1回）、生徒個々の状況をより深く理解し支援・指導の在り方を検討する「生徒理解の会（月2回）」を新規に実施するなど、校内研修の形が多様化し、研修内容も近年にない充実したものになっている。また校外の研修も、with コロナの考えから対面のものも徐々に復活してきた。今後はオンラインを含め研修の多様化が進むと思われるので、次年度も参加を促し教員の資質向上に努めていく。
	③ ICT機器（Chromebook等）を効果的に活用し、生徒が意欲的に授業に参加するよう授業改善に努める。	ICT機器を授業で活用することで、意欲的に参加していると思う生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	74.0%  <b>B</b> 【R4.7 C 65%】	（教務課）中間報告では、生徒が端末を利用した授業に慣れ、生徒自身の「参加できている」の判断基準が上がっているためか、昨年度に比べて評価が下がった。しかし、GIGA ミニ研修会での各教科等からの授業実践報告や ICT 支援員からの ICT 活用に関する状況提供等を通じて、教員が授業で Chromebook を活用する場面を意識し活用する場面が増えた結果、「意欲的に参加している」と思う生徒の割合が9%上昇した。今後も、生徒の「ICTを活用する」という基準の上昇が考えられるため、さらなる教員の ICT を活用する技術等の向上を図る。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	体調不良等で検定を受験できなかった生徒にも努力した成果を評価してもらえると生徒が感じられるような対応をとって頂きたい。教員が生徒の特性等を理解するためのスキルや ICT 機器を活用するための一定以上の技術レベルを身につけて欲しい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方策	「学びの基礎診断」に向けて取り組む際、学習の意義をよりよく伝え少しでも前向きに取り組んでもらえるよう働きかける。生徒一人一人の適性と能力に応じた指導のため、今後も「生徒理解の会」「GIGA ミニ研修」だけでなく、校外の研修にも参加するよう促し、教員の資質向上に努める。			
2 基本的な生活習慣を確立し規範意識を高めるとともに、道徳心や倫理観の向上を図る。	① いじめや非行、スマホ等を利用した不適切な行為を未然に防止するために、各種講習会・講演会を実施する。	いじめや不適切行為に関する訴え・相談件数が A 0件である。 B 1件である。 C 2件である。 D 3件以上である。	1件  <b>B</b> 【R4.7 B1件】	（指導課）不適切行為に対する訴え・相談件数が1件。早期の対応対処を行い、現在も経過観察中である。 全校生徒に「いじめ未然防止のための集会」「校内いじめ防止標語コンクール」などを行い、また、講師を招き非行防止教室を実施し、いじめを許さない態度の育成といじめの芽を摘む取組に努めた。また、「自殺予防のための集会」を実施した。 今後も、生徒への声かけや生徒観察を継続し、安心安全な学校作りを行う。
	② 生活指導をとおして、挨拶や言葉遣いをはじめとして、適切な態度が取れるように、情操教育を充実する。	校則や社会のルール、TPOを意識して生活していると思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	97.0%  <b>A</b> 【R4.7 91%】	（指導課）毎日の登校時玄関での挨拶の奨励や学年ごとに生徒指導上の問題行動に対する注意喚起する取組を継続的に行い規範意識の醸成を図っている。 将来の社会生活を見据え、特に規範意識やTPOを意識した言葉使いや身だしなみができるよう指導を継続する。来年度7月までに生徒・保護者の意見を取り入れながら校則の全面的な見直しを行う。
	③ 健全な生活習慣を確立し、朝食摂取の習慣を身につけるとともに、食育や栄養指導を充実する。	朝食を毎日食べる生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	70.0%  <b>C</b> 【R4.7 B82%】	（厚生相談課）例年、後期のアンケート調査で「朝食を食べて授業に参加している」生徒の割合は前期の割合より減る傾向がある。冬は日照時間が短くなり気温も低くなるため起きる時間が遅くなり、朝食を取らない生徒が出てきやすいと考えられる。また今年10月に実施したアンケートで、朝食を食べない理由を確認したところ「食べる時間がない」と答えた生徒が最も多かった。今後、冬休み前の保護者懇談でも生活習慣調査の結果を提示し、家庭での指導を依頼すると共に、保健だよりなどを使って、冬的生活習慣の改善について指導していく。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	昨今はスマートフォンを利用した犯罪やいじめもあるようであるが、いじめが0件という結果は良いことである。校長先生が先頭に立ち、朝のあいさつ運動を行っていることが生徒との接点を広げ、人間関係も良好になっているのではないかと。校則の見直しについて、生徒のためになるものは変えてもよいが、あえて変える必要があるのか。			

学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	今後も生徒への声かけや生徒観察を継続し、安心安全な学校づくりを行う。校則について、生徒・保護者意見を求め、来年度7月までに見直しを行う。
-----------------------------------	--

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
3 学校行事や集団活動を通じて協調性やコミュニケーション力を高め、社会人として必要な素養を身につける。	① 生徒が主体的に活動し、自分の考えを主張できるよう、授業に協働作業やグループ活動等を積極的に取り入れる。「通級」による有効な指導法を、通常級の指導に生かす。	授業中に、自分の考えや意見を述べるができると思う生徒の割合が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	84.0% <b>B</b> 【R4.7 B80%】	（教務課）「先生は一人ひとりの考え方を尊重している」の質問において、「とてもあてはまる」が約73%、「ややあてはまる」が約27%だった。この生徒との信頼関係のもと、教員が研修等を通じて得た情報を活かしながら、授業でのGoogleの各種ツールやロイロノート等を用いた発表や意見交換といった場面の設定に努めている結果であると考えられる。 今後もより協働的に学び深め合えるような学習活動の場面が設定できるよう、授業の工夫改善とICTを扱う力の向上に努めていく。
	② 学校行事等において、生徒各自が責任感を持って取り組み、自己肯定感と協調性が高まるような働きかけを行う。	校内外の各種行事に、積極的に取り組んだと思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	90.0% <b>A</b> 【R4.7 B80%】	（指導課）前期は5月に新規の行事として「千里浜清掃ボランティア」、6月には「体育祭」を行った。後期は「羽松コンサート」をコスモアイルにて行った。「羽松祭」も斬新な生徒のアイデアや要望を取り入れて実施することができた。これらの事前準備の段階で、生徒会執行部や委員会の生徒の主体的な意識を醸成してきたが、生徒の誰もが行事への自主的、積極的な参加につながった。特に「体育祭」では上級生が下級生に対して優しい配慮を見せ、他学年でも自ら進んで審判や代理をする生徒の姿も多く見られた。次年度は、はくい福祉まつりや赤い羽根共同募金などの校外でのボランティアにも積極的に参加できるよう生徒へ働きかけていきたい。
	③ 安全で安心な学校づくりに欠かせない避難訓練等において、生徒が的確な判断の下、身を守るために必要な行動を取れるように指導する。	緊急避難時に守るべき事項と、自分が取るべき行動について、理解できたと思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	97.0% <b>A</b> 【R4.7 C77%】	（総務課）避難訓練では、昨年同様、防火シャッターを降ろし、非常口を通る避難を実施した。また、新規に煙道通過体験を行った。煙に対する理解は、訓練直後のアンケート結果から深まったと判断している。しかし、7月の中間報告の結果がCだったことを踏まえ、12月のLHで「防災を知ろう(防災クイズ)」を実施した。生徒は火災災害と地震災害における適切な避難行動に関するクイズに取り組んだ。その結果、緊急避難時に守るべき事項と、自分が取るべき行動について、理解を深めることができた。来年度は地震体験車を用いて防災指導の充実を計画する。

学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	自分の意見を言えるようになると良い。それが自己肯定感につながり自ら行動することやボランティア等につながっていくのではないかな。
---------------------	---

学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	協働的に学び深め合えるような学習活動の場面が設定できるよう、授業の工夫改善とICTを扱う力の向上に努める。「羽咋福祉まつり」や「赤い羽根共同募金」などの校外ボランティアにも参加できるよう生徒に働きかける。
-----------------------------------	--

4 外部人材を招いて「就業支援コーディネートチーム」を組織し、卒業時の進路未決定者の減少に向けた取り組みを推進する。	① 各学年に適切なキャリア教育と進路指導を実施し、就業意識を高めるとともに、生徒が自ら進路目標を決定できるように支援を行う。	具体的な進路目標を持ち、進路実現のために努力すべきだと考えている生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	87.0% <b>B</b> 【R4.7 C77%】	（指導課）既存行事の他、コロナ禍で実施できなかったインターンシップを3年次生対象に実施、新規行事の企業見学会を3、4年次生対象に実施した。これらの行事は進路を考える上で参考になったと思われる。後期は、進路ガイダンスを実施し、各学年に適切なキャリア教育が実施できるよう取り組んだ。進路指導室前に進路に関する情報提供ができるコーナーを作り、年間を通じて生徒への進路に関する情報提供を行うことに努め、総合的な探究の時間での活用を促した。職業イメージを持つためには実際の体験があることが望ましいため、行事の工夫改善に取り組む。
	② 生徒の進路志望を実現するため、関係諸機関や地元企業との連携を深め、生徒の希望・適性・能力に合致した進路指導に努める。	卒業生の進路実現の割合が A 100%である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	80.0% <b>C</b> (前年 86%)	（指導課）(1月末現在)生徒の希望・適性・能力に合致した進路指導に組織的に取り組むため、就業支援コーディネートチームを校内体制として整備した。外部相談支援専門員と連携し就業支援を行った結果、就業先や関係機関と在学中につながることができ、卒業後にも継続して支援を受けられるよう確実に就労先に引き継ぐことが可能となった。現在進路未決定者は3名であるが、内2名は今後の進路については卒業後に時間をかけて考えていくことを保護者・本人ともに希望している生徒である。今後は残る1名の生徒の進路決定に向け取り組む。

学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	数字だけを昨年と比較すると評価が下がったと感じられるが、実際は生徒の実態に合わせて進路指導を行っていることが分かった。
---------------------	---

学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	今後も生徒の希望・適性・能力に合致した進路指導を行う。そのため今年度整備した「就業支援コーディネートチーム」の外部相談支援専門員と連携し就業支援を行う。
-----------------------------------	--

重点目標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
5 業務の平準化を意識した教職員の働き方改革を推進し、効果的な教育活動や生徒指導の充実につなげる。	① 教職員の多忙化改善に向けて、適切な校務分担と、効率的な業務の遂行に務める。	職場の多忙化改善に取り組んだ、と答えた教職員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	【R4.7 D66%】 80.0%  <b>B</b>	コロナ禍で中止・縮小となっていた学校行事（インターンシップ・修学旅行等）の再開や新規学校行事（千里浜清掃ボランティア活動・企業見学会等）の実施で、業務量が増えたことが原因である。 担任・副担任又は課員のなかで助け合いをすることにより業務の平準化を目指した結果、DからBに改善された。教員数が少なく、時期的に担当する業務が集中することもあるため、次年度も職員間での助け合いの意識を持ち、より効率的に校務を遂行することで、多忙化改善につなげる。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	担当業務をやるだけでなく、組織として考えたとき仕事量を上手く平準化することが大切である。お互いにカバーしあうことを全員が意識していくことが重要である。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	教員数が少ない学校のため、1人に係る業務が多い。次年度も担任・副担任又は課の中で助け合い、組織として業務を進めていく。			